

王羲之と王敦及び庾亮との関係について

——『世説新語』を読む中で——

塚 本 宏

はじめに

六朝時代南朝の宋（420～479）の劉義慶（403～444）によつて編集された『世説新語』（以下略して『世説』とする）は、後漢末（二世紀末）から東晋末（五世紀初）の激動期に生きた貴族、知識人の言動の記録である。小話集の形式をとり、全篇の小話の総数は一、一三〇話、登場する人物の総数は七八八名である。

王羲之（307頃～365頃）が登場する小話は四五話で十一位にランクされる。一位は侍中、吏部尚書、尚書僕射、太保などを歴任した謝安の一一四話、二位は荊州刺史、征西大將軍、大司馬を歴任した桓温の九四話、三位は丞相、太傅で、東晋の元帝司馬睿を補佐し、羲之の伯父の王導の八七話、四位は清談の名手である劉惔の七六話、五位は中書令、予州刺史、江荆予三州刺

史の庾亮と、元帝の末子で東晋の簡文帝の司馬昱の五八話である。以下一四位までの人物をまとめたのが〈表1〉である。また、羲之の小話の中に登場する人物の回数を数えたのが〈表2〉であり、各自の小話数が十話以上の人物を対象として羲之との関係率を算出したのが〈表3〉である。

さて、本稿は、東晋の征南大將軍、江州刺史を歴任し、謀叛を起して失敗した羲之の伯父の王敦（〈表1〉では一〇位）及び前述の庾亮と羲之との関係を、『世説』の中で調査し、この動乱期をいかに生き抜き、王敦と庾亮が王羲之とどのような係わりがあるかを見ていき、また、業績や人間性を含めて考察を加えていきたい。なお、〈表1〉の率は『世説』全篇の小話数一一三〇話に、〈表2〉は王羲之の小話数45話に、〈表3〉の関係率は羲之が登場する小話と各自の小話に対する率である。

〈表1〉

| 順位 | 登場人物 | 小話数 |
|----|---------------|--------------|
| 1 | 謝安 (320/385) | 一一四話 (一〇・二%) |
| 2 | 桓温 (312/373) | 九四話 (八・三%) |
| 3 | 王導 (267/330) | 八七話 (七・七%) |
| 4 | 劉惔 (267/330) | 七六話 (六・七%) |
| 5 | 庾亮 (289/340) | 五八話 (五・一%) |
| 5 | 司馬昱 (320/372) | 五八話 (五・一%) |
| 7 | 王濛 (309/347) | 五七話 (五・〇%) |
| 8 | 殷浩 (309/347) | 五〇話 (四・四%) |
| 9 | 支遁 (314/366) | 四九話 (四・三%) |
| 10 | 王敦 (266/324) | 四六話 (四・〇%) |
| 11 | 王羲之 (307/365) | 四五話 (三・九%) |
| 12 | 王衍 (256/311) | 四二話 (三・七%) |
| 13 | 王戎 (234/305) | 三六話 (三・二%) |
| 14 | 周顗 (269/322) | 三四話 (三・〇%) |
| 14 | 桓玄 (369/404) | 三四話 (三・〇%) |

—

王敦 (266/324)、字は處仲、臨沂 (山東省) の人。丞相の王導 (267/330) と従兄弟であり、王羲之の従伯父 (即ち、王敦の父王基と、羲之の祖父王正とが兄弟) である。王敦は王導と共に東晋創業の功臣で、征南大將軍、江州刺史を歴任、後に反乱を起こしたが失敗した。妻は晋の武帝司馬炎の娘である。

〈表2〉

| 順位 | 登場人物 | 小話数 | 順位 | 登場人物 | 小話数 |
|----|------|------------|--------|------|----------|
| 1 | 謝安 | 10 (22.2%) | 7 | 王敦 | 3 (6.7%) |
| 2 | 阮裕 | 5 (11.1%) | 7 | 殷浩 | 3 (6.7%) |
| 3 | 劉惔 | 4 (8.9%) | 3 | 王胡之 | 3 (6.7%) |
| 3 | 支遁 | 4 (8.9%) | 3 | 謝万 | 2 (4.4%) |
| 3 | 王導 | 4 (8.9%) | 3 | 王濛 | 2 (4.4%) |
| 7 | 庾亮 | 4 (8.9%) | 3 | 郝愔 | 2 (4.4%) |
| 7 | 許詢 | 3 (6.7%) | 16 | 王述 | 2 (4.4%) |
| 7 | 孫綽 | 3 (6.7%) | (以下省略) | 諸葛恢 | 1 (2.2%) |

『晋書』卷九十八 (列傳第六十八) には、

王敦字處仲、司徒導之從父兄也。父基、治書侍御史。敦少

有奇人之目、尚武帝女襄城公主、拜駙馬都尉、除太子舍人。

と最初に記されている。また、羲之との関係では、『晋書』卷

八十 (列傳第五十) には、

深爲從伯敦導所器重。時陳留阮裕有重名、爲敦主簿。敦嘗

謂羲之曰、「汝是吾家佳子弟。當不減阮主簿。」裕亦目羲之、

與王承王悦爲王氏三少。

とあり、羲之は從伯父の王敦や王導に深く将来を属望されていた

〈表3〉

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|--------|
| 22 | 20 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 順位 |
| 司馬昱 | 周顥 | 桓玄 | 王恭 | 王濛 | 王献之 | 郝超 | 王導 | 劉惔 | 殷浩 | 王胡之 | 王敦 | 庾亮 | 支遁 | 謝安 | 王脩 | 孫綽 | 謝万 | 王述 | 許詢 | 郝愔 | 阮裕 | 登場人物 |
| 58 | 34 | 34 | 29 | 57 | 28 | 27 | 87 | 76 | 50 | 16 | 46 | 58 | 49 | 115 | 11 | 32 | 20 | 17 | 20 | 11 | 13 | 各自の小話数 |
| 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 4 | 4 | 3 | 1 | 3 | 4 | 4 | 10 | 1 | 3 | 2 | 2 | 3 | 2 | 5 | 義之の小話数 |
| 1.7% | 2.9% | 2.9% | 3.4% | 3.5% | 3.6% | 3.7% | 4.5% | 5.2% | 6.0% | 6.2% | 6.5% | 6.9% | 8.1% | 18.6% | 9.0% | 9.3% | 10% | 12% | 15% | 18% | 38% | 関係率 |

王羲之と王敦及び庾亮との関係について（塚本）

〈表4〉『世説新語』の中の王敦と庾亮（注）小話欄の数字は小話の番号を表す。 ※印は王羲之が登場する小話である。

| 下 卷 | | | | | | 中 卷 | | | | | | | | | | 上 卷 | | | | 卷 |
|-------|-------------|------------|----------|-------|---------------|------------|----------------|----------|-----------|-----------------------|--------------------|------------------------|--------------------|--------------------|------------------------|-----------------------|---------------|-----------------------|------------|---|
| 賢媛第一九 | 棲逸第一八 | 傷逝第一七 | 企羨第一六 | 自新第一五 | 容止第一四 | 豪爽第一三 | 夙慧第一二 | 捷悟第一一 | 規箴第一〇 | 品藻第九 | 賞譽第八 | 識鑒第七 | 雅量第六 | 方正第五 | 文学第四 | 政事第三 | 言語第二 | 德行第一 | 篇 名 | |
| 32 | 17 | 19 | 6 | 2 | 39 | 13 | 7 | 7 | 27 | 88 | 156 | 28 | 42 | 66 | 104 | 26 | 108 | 47話 | 小話数 | |
| | | | | | 15・17 (2) | 6・8 (6) | 1・2・3・4 (1) | 5 (1) | 12 (1) | 6・12・15・21 (4) | ※55・58・79 (7) | 43・46・49・51 (3) | 6・13・15 (3) | 28・31・32・33 (4) | 20 (1) | | 37・42 (2話) | | 王敦の小話(小話数) | |
| | | | | | 6 | 5 | | 3 | 2 | 34 | 16 | 7 | | 7 | 2 | | 4名 | | 登場人物 | |
| | 9・11 (2) | 8・9 (2) | 4 (1) | | 23・※24 (2) | 7 (1) | | | | 15・17・22・23・70 (5) | 69・※72・107 (11) | 42・64・65・68・41 (11) | 33・35・38・41 (2) | 11・16・23 (3) | 48・※25・35・37・45 (5) | 79・99・75・77・78 (6) | 14 (1) | 30・41・49・50・52 (5) | 31 (1話) | |
| | 3 | 3 | 2 | | 10 | 2 | | | | 15 | 20 | 4 | 3 | 21 | 16 | 1 | 7 | 1名 | 登場人物 | |

| 合計 | 下 | | | | | | | | | | | | | | | | | 卷 | | | | |
|--------|------------|-------|----------|--------------|-------|-------|---------------|-------|----------|-----------------|-----------|-----------------|-------|-------|-------|-------|------------|----|--|--|--|--|
| 36篇 | 仇陳第三六 | 惑溺第三五 | 紕漏第三四 | 尤悔第三三 | 讒險第三二 | 忿狷第三一 | 沙修第三〇 | 儉嗇第二九 | 黜免第二八 | 佞諂第二七 | 輕詆第二六 | 排調第二五 | 簡傲第二四 | 任誕第二三 | 寵札第二二 | 巧芸第二一 | 術解第二〇 | | | | | |
| 1,130話 | 8 | 7 | 8 | 17 | 4 | 8 | 12 | 9 | 9 | 14 | | 33 | 65 | 17 | 54 | 6 | 14 | 11 | | | | |
| 46話 | 3・4 (2) | | 1 (1) | 5・6・8 (3) | | | 1・2・10 (3) | | | 6・※7 (2) | ※5 (1) | 60 (1) | | | | | 5・8 (2) | | | | | |
| 126名 | 9 | | 1 | 7 | | | 8 | | | 4 | 3 | 5 | | | | | 3 | | | | | |
| 58話 | | | | 10 (1) | | | 8 (1) | | 8 (1) | 2・3・4・※5 (4) | 47 (1) | 23・26・27 (3) | | | | | | | | | | |
| 126名 | | | | 1 | | | 1 | | 2 | 6 | 3 | 5 | | | | | | | | | | |

る様子が記されている。陳留の阮裕は、既に世に重んぜられており、王敦の主簿となっていて、その阮裕に劣らぬ人物となるであろうと義之は王敦に面と向かって誉められている。そして、阮裕も義之のことを、王承と王悦と義之との三人が「王氏の三少」であると称えている。即ち、王家のホープ若き三人の内の

一人が義之であるとされている。

王敦について「中國人名大辭典」では、

導從兄、字處仲、尚武帝女襄城公主。拜駙馬都尉、出爲揚州刺史。元帝鎮江東、敦與導同心翼戴。杜弼亂、討平之。進征南大將軍、拜侍中、江州牧。敦既得志、遂欲專制朝廷。帝畏而惡之。引劉隗等爲心膂。遂構嫌隙。敦率衆內向、以誅隗爲名。入石頭、殺周顗。戴淵、還屯武昌。帝崩。明帝起兵討之。敦病死。

とある。

さて、『世説』における義之と王敦との接点は、〈表4〉によってその全貌がわかるが、二人が登場する小話はわずかに※印の三話である。王敦の小話は全体で四六話であるから、王敦の全体の六・五％に義之は登場していることになる。その三話とは次の各小話である。即ち、

- (1) 賞誉第八——55
- (2) 輕詆第二六——5
- (3) 佞諂第二七——7

である。丞相の王導は、八七話中義之の登場は五話であったので全体の五・七％で、率からいうと若干王敦のほうが上である。さて、はじめの「賞誉」篇の「賞誉」であるが、「賞誉」とは「ほめことば」の意であり、人物についての批評のうち、ほ

めごとを収録した篇である。前の篇の識鑒第七及び次の品藻第九とともに人物批評を中心とした篇であり、このような内容は漢末魏初に見られる風潮である。そして、『世説』の中で最も興味深い部分であり、特に賞誉第八は具体的な「ほめことば」の使い方、即ち、その機知に富んだ表現には感心させられる場面は少なくない。

先ず、賞誉第八55に

大將軍 右軍に語る。「汝は是れ我が佳き子弟なり、当に阮主簿に減ぜざるべし」と。

とある。阮主簿とは阮裕のことであり、阮裕は若いころから德行があつたので王敦は彼を召して主簿にした。しかし、王敦に反乱の志があることを知つた彼は酒にひたり職務に精勵しなかつたことは有名であるが、その主簿である阮裕にもひけをとらないのが貴殿であるときっぱりと義之の面前で語つたのである。ということは、王敦は義之のことを大いに買つていたのであるが、一体義之のどのような所が気に入つたのか。その点は具体的には述べられていないので不明である。ただいつも王敦の目前で仕事に励んでいる優秀な阮裕の姿を見ているわけであるから、その阮裕にひけをとらないということは王敦は義之を思いきり称賛したのであり、具体的に阮裕という立派な人物を例に出し義之と比較して誉めているということになる。

また、「我佳子弟」とは、王家の一門のことを考慮して言っているものであり、義之の存在は今後の王家の發展に欠かせない重要人物であり、得がたい人材であると王敦は見込んだのである。

さて次に、賞誉第八の中で、王敦のほめことばが義之以外の人物に対してどのように使われているかについて見ていくと、王敦の養子である王愔については、賞誉第八49に、

王大將軍其の兒を称して云う。「其の神候可ならんと欲するに似たり」と。

とある。「神候可ならん」とは「精神の反応はどうか及第だろう」という微妙な語感で表現している。あくまでも自分の身内について評しているものであるから控え目なのは当然であろう。なお、王愔は生卒年代は不明、字は安期、臨沂の人、王含（王敦の兄）の子であつたが、叔父の王敦の養子となつた。そして、王敦の武衛將軍となつて活躍したが、王敦の反乱の際に誅殺されたという悲劇の人物である。そして、その悲劇そのものが、識鑒第七15に、むしろ王愔の美談として掲載されている。即ち、王敦が養子の王愔について「神候可ならんと欲するに似たり」と控え目に述べたこと、また、精神は及第であろうと評したことについて具体的に裏付ける美談であり、王敦の王愔を見る目の確かさが立証される事件である。そして、それは王愔の実父

の王含との間に起ったのである。即ち、

王大将軍既に亡じ、王応は世儒に投ぜんと欲す。世儒は江州為り。王含は王舒に投ぜんと欲す。舒は荊州為り。含 応に語りて曰く、「大将軍 平素江州と云何^{いかん}。而るに汝之に帰せんと欲するや」と。応曰く、「此れ乃ち宜しく往くべき所になり。江州は人の彊盛の時に当たりて、能く同異を抗^あぐ。此れ常人の行う所に非ず。衰厄を觀るに及べば、必ず慇懃を興さん。荊州は文を守る。豈能く意表の行事を作さんや」と。含従わず、遂に共に舒に投ず。舒果たして含父子を江に沈む。彬 応の当に來たるべきを聞き、密かに船を具して以て之を待つとも、竟に來たるを得ず、深く以て恨みと為す。

とある。この小話は王敦が反乱を起こして失敗し敗死した後、親族、即ち王含と王応の身のふり方をどのように決めるかという問題である。結論的には息子の王応が望んでいた王彬（王正の子で王敦の従兄弟）の所に行かなかつたために悲劇が起つてしまつたのである。実父の王含は荊州刺史であつた王舒（王会の子で王敦の従兄弟）に身を寄せたいと思つていたが、息子の王応は江州刺史であつた王彬の所に身を寄せたいと思ひ、二人は対立してしまつた。この対立は結果的には残念なことになつてしまつたのであるが、王応が王彬の所へ身を寄せることを主張したのは、それなりの理由があつたのである。その理由は、

王彬は王敦の生前にどのくらい仲が良かったかどうかはわからないが、王彬の性格は景氣がいいときにも他人の意見を聞いてくれるし、他人が異議を申し立てることもできる度量の大きい人物であること。これは仲々常人のできることではなく、落ちめになつてゐる人々を見たときに、きつと惻隱の情を起こしてくれるに違ひないと見込んだのである。そして、一方、実父の力説する王舒は、筋を通し規則をきちんと守る人で、常識はずれのことをほとんどしない厳格な人であると息子の王応は見えていた。この王応の分析は実に明解であり、前述のように王敦が賞第八49の中で述べているように、王応は「神候可ならん」とのほめことば通りである。ところが実父の王含は息子の言うことに全く耳をかすことなく、一方的に王舒の所に二人で身を寄せることに決めたが、期待は大きくはずれてしまい、王舒の行動は実に厳しく、王含、王応父子を長江に沈めて殺してしまつた。これが前述の「誅殺」である。一方、連絡を受けて舟を出して首を長くして待つてゐた王彬は、王含父子が結局來られなかつたことで心の底から残念がつたという悲劇である。この悲しい出来事は対象的な王含と王応の二人の考え方の違い、人物を見抜く眼力の違いによつて生じてしまつたのである。しかし、この悲劇はもとをただせば王敦の反乱に起因しているのであるが、王敦が、養子の王応のことを「神候可ならんと欲す

るに似たり」と、王応の人間性を買っていて、将来に渡って見抜いていた王敦の洞察力の大きさが表われている小話である。

実父の王含は、常識的な考え方をするが、表面的で形式的な面があったのである。権威主義者でもあり、人を信頼することの重大さなどについては、あまり深く考えなかったであろう。王舒は従兄弟であつたということで充分な信頼関係を保つていたと思ひ込んでいたことが、王含の甘い判断だったのである。従兄弟であるという形式的な関係だけで頭から信じてしまった王含の表面的なものの考え方に問題があつたのである。王含の弟である王敦が反乱を起したということは、たとえ近い親戚であろうが究極的なものの考え方をするのは当然である。王敦に荷担したら同罪であるという厳しい世間の眼がある。反乱者の関係者とは一切係わりを持ちたくないというのが本心である。表面的にしか考えようとしない人物は当然形式的に自分を守ろうという心理が働き、守るために自分に不益な人物は結局は消してしまうという結末になるのである。形式的な考えを持つ王舒は、正に信頼できない人物だったのである。

それでは、王含自身はどんな人物だったのであるか、言語第二37・方正第五28に登場するが、多くの人々から信頼を得るような人物ではない。やはり形式的であり、そして、職務上でのトラブルの絶えない人物であつた。性格的にも怠惰だったよ

うである。言語第二37から見えていくと、

王敦の兄含 光禄勳為り。敦既に逆謀し、南州に屯拠す。

含 職を委て姑孰に奔る。王丞相闕に詣りて謝す。司徒・丞相・揚州の官僚、問訊せんとするも、倉卒にして何をか辞とするを知らず。顧司空時に揚州別駕為り。翰を援りて曰く、

「王老禄は遠く流言を避け、明公は路次に蒙塵す。群下は寧からず。尊体の起居、如何なるかを審らかにせず」と。

とある。王敦が謀反を起こしてしまい、兄の王含としてはその身の処し方に一瞬迷つたことであろう。王敦は追われて南州の姑孰の田舎に立てこもり、王含も光禄勳の職務を投げ出してやはり姑孰に逃げてしまった。そこで、王導（王敦の従兄弟）は宮中に参内して身内の不始末を謝罪した。王導の周囲の役人たちは謝罪に奔走している王導に見舞いの手紙を書こうとしたが、あわただしさにまぎれ何をどのように書いたらよいかわからなかった。しかし、司空の顧和は揚州別駕の地位であつたが、次のような見舞文を書いた。「光禄勳の王含は流言を避けて遠くへ行つてしまったが、丞相の王導様は路ばたにはこりを浴びて奔走しておられます。わたくしたち下僚一同は心安まらぬ思いです。」とある。王家から出た不祥事は王家の誰かが始末をしなくてはならない。本来ならば兄の王含が先頭を切つてそれを行なうべきなのに逃げてしまうということは王含の職務に対す

る精神に問題ありということになる。また、方正第五28には、

王含 廬江郡と作り、貪濁狼藉なり。王敦其の兄を護り、故に衆坐に於いて称す、「家兄 郡に在りて定めて佳ならん、廬江の人士咸之を称す」と。時に何充 敦の主簿為り。坐に在りて、色を正して曰く、「充は即ち廬江の人なり、聞く所此と異なる」と。敦 默然たり。旁人之が為に反側するも、充 晏然として神意自若たり。

とある。王含の性格なのか、「貪濁狼藉」であつては太守としては勤まらないことは目に見えている。それを弟の王敦が大勢の人が集まつた席で大いに誉めている。これを聞いていた王敦の主簿であつた何充は、厳しい顔つきで「聞く所これと異なる」と断言している。それを聞いた王敦は黙つて何も言わなかつた。何充は平然として表情を変えることはなかつたというのであるが、王含と王敦の兄弟の間は一体どうなつてゐるのかということになる。あまりにも大衆を馬鹿にした態度であり、この兄弟は人間として問題があり、人前に立てるような人物ではないということがこの小話の内容から察せられる。王含はよくないが、王敦にもさらに問題がある。兄弟とは言えお互いにもつと厳しく、人徳をもつて生きるといふ精神を大切にすべきであるが、この動乱の時代に生きのこるためには少々の欲得はある程度止むを得ないのであるか。計画性のある木目の細かい生き方な

どはふさわしくなかつたのであろうか。

二

王敦のほめことばが、王羲之以外の人物にどのように使われているかについて見ると、賞誉第八58に

王大將軍丞相に書を与えて、楊朗を称して曰く、「世彦は識器理致、才隱明断なり。既に国器為り、且つ是れ楊候淮の子なり。位望絶だ陵遲為れば、卿も亦た之と処るに足る」と。

とある。これは西晋の雍州刺史であつた楊朗をほめる場面であり、「識器理致」「才隱明断」「国器」などがほめことばである。楊朗は、字は世彦、華陰(陝西省)の人、西晋の冀州刺史であつた楊淮の子であり、「国器」即ち国家第一級の人物とは最高のほめことばである。なお、羲之のことは、庾亮が賞誉第八72で、「逸少は国挙」「拔萃国挙」とほめている。楊朗は「国器」、羲之は「国挙」である。また、楊朗については、同じく賞誉第八63に

世 楊朗を目す、「沈審経断」と。蔡司徒云う、「若し中朝をして乱れざらしむれば、楊氏の公作ること方に未だ已まざりしならん」と。謝公云う、「朗は是れ大才なり」と。

とある。世間が楊朗のことを「沈審経断」釈して即ち「熟慮即断」、そして、東晋の揚州刺史、録尚書事、侍中、領司徒の蔡

謨（281～356）は、楊家は三公が輩出される家柄とほめ、最後に尚書僕射、録尚書事、侍中、太保を歴任した謝安（320～385）は、「大才」と最高のほめ方である。そして、識鑒第七13に、

王大将軍始めて下るや、楊朗苦諫するも従われず。遂に王の為に力を致し、中鳴雲露車に乗り、逕ちに前みて曰く、「下官の鼓音を聴け。一進して捷たん」と。王先ず其の手を把りて曰く、「事克たば、当に相用いて荊州と為すべし」と。既にして之を忘れ、以て南郡と為す。王敗るるの後、明帝朗を収えて之を殺さんと欲す。帝尋いで崩じ、免るるを得たり。後三公を兼ね、数十人を署して官属と為す。此の諸人は当時並びに無名なりしも、後皆知遇せらる。時に其の人を知るを称せらる。

とある。王敦の謀反を繰返し諫め続けたのが楊朗であったが、結局聞き入れられずに、楊朗も不本意ながら協力することとなった。王敦は謀反が成功したら荊州刺史にとりたてようと楊朗と約束したが、いざとなったら王敦はそれを忘れてしまい、南郡太守に任命した。その後王敦は敗れ、明帝（司馬紹299～325）は楊朗を捕らえようとしたが、帝は崩御したために命拾いをした。後に楊朗は三公の職を兼任したという素晴らしい人物であった。王敦の周囲には楊朗や前述の王応のような人物が居て、謀反を何とか食い止めようとしたが、王敦の欲望は誰もおさえる

ことはできなかったのである。

次に、義之と王敦、そして、王導と庾亮とが関係した軽詆第二十六5に

王右軍少き時甚だ洪訥なり。大将軍の許に在りしとき、王・庾の二公後れて来たる。右軍便ち起ちて去らんと欲す。大将軍之を留めて曰く、「爾が家の司空なり。元規復た何の難ずる所あらん」と。

とある。義之が若い頃「洪訥」であったと言われるが、ものがすらすらと言えない児のことをよく「口が重い児」と言われる。これは先天的なものではなく、子供の頃の成長過程において誰もが少なからず体験することなのではないだろうか。このことについては、『晋書』巻80王義之伝に「義之、幼くして言に訥なり。人未だ之を奇とせず」とある。義之の場合は後世出世するから洪訥にもかかわらず立派な人物に成長したという軽い意味に使われているのであって、それほど問題になることではないのではないか。ましてや、その次の、王敦の所に居て、王導と庾亮が後から来たとき、義之はいきなり立ち上がった出て行くとした行為は、この洪訥とは無関係である。洪訥だったからとか、人見知りをよくしたとかいう成長期における心理的な問題と義之がいきなり立ち上がったことは何の係りあいもない。それでは、どうして義之は「スッ」と立ち上がったのであ

ろうか。王導(267-330)は親戚ではあつても王家一族の大先輩であり、丞相という地位にある大人物である。同行の庾亮(289-340)も中書令を皮切りに、予州刺史から江荆予三州刺史を歴任した政治家である。その兩人が突然義之の前に現れたのであるから驚いたことであろう。また、席を外すという大先輩への礼儀からかもしれない。このような礼は義之には自然に身についていたのであろう。また、庾亮はひとくせもふたくせもある人物と言われているので、何か言われないうちに義之も自然と身を交そうとしたのであろうか。たとえば、庾亮についての評を見ると、軽詆第二十六3に

深公云う、「人庾元規も名士と謂うも、胸中に柴棘三斗許りあり」と。

とある。僧侶である竺法深(286-374)が「胸の中にいばらのとげが三斗もある」人物と庾亮を酷評している。かつて何か事件が仏教界に対してあつたからであろう。合理的な考え方をする庾亮は法律をもつて仏教を弾圧したのであろうか。それにしても大変な恨まれようである。また、庾亮の積極的な行動について、やはり軽詆第二十六4に

庾公は権重く、王公を傾くるに足る。庾は石頭に在り、王は冶城に在りて坐するに、大風塵を揚ぐ。王扇を以て塵を払いて曰く、「元規 塵もて人を汚す」と。

とある。庾亮は王導を圧倒するほどの勢いで強い権力をもつて体当たりしている様子がわかる。扇で塵を払う王導は度量が大きく融通無碍の人であり、この時石頭(建康の西郊)にいた庾亮が都に戻ってくることが伝わってきたので、心の広いはからいで裁いたので世間の評はおさまったのである。扇で塵を払うのは庾亮を疑つてした行為ではない。しかし、王導の眼からは塵やほこりをたてて人にひっかけて汚がす勢いで権力をふるつていると見えたのである。庾亮の人柄の一面を語っている小話である。

次に、仮譌第二十七7は、義之が十歳にまだならない頃、王敦に可愛がられていた時のことである。即ち、

王右軍年十歳より減ずる時、大將軍甚だ之を愛し、恒に帳中に置きて眠らしむ。大將軍嘗て先ず出で、右軍猶未だ起きず。須臾にして錢鳳入り、人を屏けて事(しりぞ)を論じ、都て右軍が帳中に在るを忘れ、便ち逆節の謀を言う。右軍覺めて既に論ずる所を聞き、活くる理無きを知り、乃ち剔吐して頭面被褥を汚し、詐りて孰眠す。敦事を論じて半ばに造り、方めて右軍が未だ起きざるを意い、相与に大いに驚きて曰く、「之を除かざるを得ず」と。帳を開くに及び、乃ち吐唾從横なるを見、其の実に孰眠せるを信じ、是に於いて全きを得たり。時に其の智有るを称す。

とある。義之と王敦との関係は、この殺伐とした戦乱の時代にあつてもいつの世も変わらぬ伯父と甥との親密な間柄であり、義之を帳中に入れてまで可愛がることは日常茶飯事のことである。何も特別のことではなく平安な姿そのものである。しかし、この小話は義之が命拾ひした時の機智について称賛するのが本旨のように思える。「仮譎」とは、本来は「うそ」「いつわり」の意であるから、この義之の機智がたとえ嘘であり、王敦を騙したとしても謀反の話し合いを聞いてしまったのであるから、騙してやろうなどと悠長に考えている暇などない。とにかく殺されるかもしれないという瀬戸際だったわけであるから、義之が本能的に危機から脱しようという生の欲望から出た行為である。「指をのどに突つこんでへどを吐き、顔からふとんからすつかりよごし、熟睡しているふりをした」ということは、確かに生きる為の義之の仮譎的行為だったのである。それが義之の咄嗟に思いついた行為であり、何もしなかったら殺されていたのである。人間いったん命を落すかもしれないと追詰められた時、思いもよらない力が発揮されるものである。一瞬この世の人とは思えない恐しい鬼となった王敦は「之（義之のこと）を除かざるを得ず」と思うのも当然であろう。結果的には義之は機智をもつて切り抜けたと判断され、世評は称賛しているのであるが、「活くる理無きを知り」身体中で感じた時の義之の

顔、「敦事を論じて半ばに造り、方めて未だ起きざるを意い」の時の王敦の顔を、それぞれ想像すること自体実に恐しいことである。つい何時間か前まで平安な気分で帳中に居た伯父と甥の二人が、突然絶壁に立たされたような心理状態である。

しかし、ここで問題になるのは、この小話の主人公は義之ではなくて、王允之のことであると後に伝えられている。これは『晋書』では王義之伝ではなく、王允之伝に掲載されている。

即ち、『晋書』卷七十六（列伝第四十六）に

允之 字は深猷、総角にして、従伯敦 謂爲へらく己に似たり。恒に自を以つて随い、出れば則ち輿を同じくし、入れば則ち寝を共にす。嘗つて夜に飲す。允之醉を辞して先に臥す。敦 錢鳳と逆を爲すことを謀る。允之已に醒め、悉くその言を聞く。敦或は己を疑うを慮る。便ち臥處に於いて大吐し、衣の面並べ汚す。鳳既に出て、敦果して照視し、允之の吐中に臥したるを見て、以つて大酔したりと爲し、復たこれを疑わず。時に父の舒、始て廷尉に拝せられ、允之還つて定省を求め敦これを許す。都に至り敦鳳の謀議の事を以つて舒に白す。舒は即ち導と俱に明帝に啓す。

とある。内容は『世説』仮譎第二十七と全く同じである。どうして『晋書』では允之伝に記されているのであろうか。あるいは、もともと義之の話だったのをそっくり允之の話にしてし

まったのか、とにかくそれらの理由は不明である。しかし、

『世説』の劉孝標の注(略して劉注)には

按ずるに諸書皆王允之事と云う。而して此れ羲之と言うは
謬と疑う。

と明言しているが、両論あると解すべきであろうか。

なお、允之については、羲之の尺牘「十一月四日帖」(『右軍
書記』所収)に登場する。即ち

十一月四日、右將軍・會稽内史たる瑯琊の王羲之、敢へて
書を司空の高平の郗公足下に致す。上祖は舒、散騎常侍、撫
軍將軍、會稽内史、鎮軍儀同三司たり。夫人は、右將軍の劉
□の女なり。晏之・允之を誕めり。允子は、建威將軍・錢塘
令・會稽都尉・義興太守・南中郎將・江州刺史・衛將軍たり。
夫人は、散騎常侍、荀文の女なり。希之・仲之を誕めり。

(中略)

此れは是れ郗家への婚を論する書。書迹は夫人に似たり。
とある。この「十一月四日帖」は、羲之の子の王献之と郗曇の
娘との婚姻のために王家から郗家に出された書状(家族書き)
である。後半部分は王献之の性格などを含めて詳細が記されて
いる。王允之については、官名とともに、父王舒、兄晏之、子
に希之と仲之、そして夫人は舒と允之について記されている。

三

庾亮(289〜340)、字は元規、鄢陵(河南省)の人。東晋の明
帝(323〜325在位)穆皇后の兄。中書令として王導とともに成帝
(325〜342在位)を補佐し朝廷の実権を握った。蘇峻の反乱の責
任をとって予州刺史となり、その後、江荆予三州刺史となった。
『晋書』卷七十三(列伝第四十三)に、

庾亮字元規、明穆皇后之兄也。父琛、在外戚傳。亮美容、
善談論、性好莊老、風格峻整、動由禮節、閨門之内不肅而成、
時人或以爲夏侯太初、陳長文之倫也。年十六、東海王越辟爲
掾、不就、隨父在會稽、嶷然自守。時人皆憚其方儼、莫敢造
之。(後略)

と冒頭にある。「中國人名大辭典」には、

袁弟子。字元規。明穆皇后兄。風格峻整、動由禮節。中興
初拜中書郎。侍講東宮、時帝方任刑法。以韓子賜太子。亮諫
以申韓刻薄傷化。不足留聖心。太子甚納焉。明帝立、累遷中
書監、加左衛將軍。以功封永昌縣公。成帝初徙中書令。蘇峻
平、亮鎮蕪湖。郭默叛、亮率步騎二萬討破之。遷都督江荆豫
益梁雍六州諸軍事、征西將軍。鎮武昌、卒諡文康。亮在武昌。
諸佐吏殷浩之徒、乘秋夜往共登南樓。亮至、將起避。亮徐曰、
諸君少住。老子於此興復不淺。便據胡牀談詠、其坦率多類此。

とある。

庾亮と羲之との『世説』での出会いは、前述の表4のように、

- (1) 方正第五—25
- (2) 賞誉第八—72
- (3) 容止第一四—24
- (4) 輕詆第二六—5

の四話であり、庾亮の全体が五十八話であるから六・九%である。

方正第五25は、庾亮と羲之との直接の出会いではなく、庾亮の息子庾会と諸葛恢の長女文彪との結婚後のことであり、庾会が蘇峻に殺されるという悲劇が起ってしまったのである。即ち、

諸葛恢の次女は太尉庾亮の兄に適ぎ、次女は徐州刺史羊忱の兄に適ぐ。亮の子蘇峻に害せらるるや、改めて江彪に適ぐ。恢の兄鄧攸の女を娶る。時に謝尚書其の小女の婚を元むるに、恢乃ち云う、「羊・鄧は是れ世婚なり。江家は我伊を顧み、庾家は伊我を顧みる。復た謝袁の兄と婚する能わず」と。恢の亡ずるに及び、遂に婚す。是に於いて王右軍謝家に往きて新婦を見るに、猶お恢の遺法有り。威儀端詳、容服光整たり。王歎じて曰く、「我在りて女を遣るも、裁かに爾るを得るのみ」と。

とある。謝袁の息子の謝石に末娘を嫁にやるわけにはいかない

と諸葛恢は断言していたが、いざ諸葛恢が亡くなると二人は結婚した。そして、羲之がここで登場するのであるが、羲之が謝家へ二人の様子を見にいくと、彼女は父の恢の教えをしつかりと身につけていてよく守り、態度ふるまいはきちんとしてゆきとどき、容貌や身なりは輝くばかりに整っていた。その姿を見た羲之は「私が生きているうちに娘を嫁に出したとしても、あのくらいにしつけられるのがせいぜいだ。」と、驚いていたというのである。当時は羲之のように親戚知人が新婦を見に訪れる風習があったのである。

謝石(327—388)は、字は石奴、陽夏(河南省)の人。謝安(320—385)の弟であり、東晋の尚書令であった。『晋書』卷七十九(列伝第四十九)に、

石字石奴。初拜祕書郎、累遷尚書僕射。征句難、以勳封興平縣伯。淮肥之役、詔石解僕射、以將軍假節征討大都督、與兄子玄、琰破苻堅。(後略)

とある。また、「中國人名辭典」には、

萬弟。字石奴、初拜祕書郎。累遷尚書僕射、淮肥之役、以將軍假節征討大都督、苻堅敗、以功遷尚書令。封南康郡公。在職務存文刻。無他才望、直以宰相之弟、兼有大勳。遂居清顯。卒諡襄。

とある。淮肥の役に將軍假節征討大都督を以って苻堅を敗り、

その功を以って尚書令に遷り、南康郡公に封ぜられた。そして、最後は蘇峻の乱で殺されてしまったのであるが、蘇峻の乱については庾亮が鎮圧したのである。そこで、その蘇峻については庾亮を語る上で欠かせない人物である。『晋書』卷百(列伝第七十)に

蘇峻字子高、長廣掖人也。父模、安樂相。峻少爲書生、有才學、仕郡主簿。年十八、舉孝廉。永嘉之亂、百姓流亡、所在屯聚、峻糾合得數千家、結壘於本縣。于時豪傑所在屯聚、而峻最强。遣長史徐璋宣檄諸屯、示以王化、又収枯骨而葬之、遠近感其恩義、推峻爲主。遂射獵於海邊青山中。

と冒頭にある。蘇峻は少くして書生となり、才学があつた。永嘉の乱の時に流民数千家を糾合し、壘を本縣に結び遠近に推されて主となる。そして、元帝に徴され安集將軍を仮拝し、臨淮内史に除せらる。王敦の反逆に衆を率いて京師に赴き、大いに之を破り、冠軍將軍、歷陽内史に進む。成帝の時、威望漸く著れ鋭卒萬人を有し、器械甚だ精、江外の地を委任された。潜かに異志を懷き、庾亮に徴されて大司農となり、遂に反し宮城を陥れ、自ら驃騎領軍將軍となり尚書の事を録す。後に帝を石頭に遷す。温嶠・庾亮・陶侃、師を會して討つに會い敗死す。と『晋書』の要約である。蘇峻は才が克ちすぎたのであろうが、元帝に安集將軍として持ち上げられ、その後、臨淮内史と

なつて王敦の反逆を鎮圧するのに功をたてたのはよかつた。やがて冠軍將軍、歷陽内史となつたが、何が氣に入らないのか、庾亮討伐を名目として反乱を起こし、建康の都に改めて入つたが、温嶠・陶侃そして庾亮らによつて鎮圧され結局敗死した。

『世説』仮譌第二十七・八に、庾亮と陶侃との会見がある。即ち、

陶公上流自り来たりて、蘇峻の難に赴かんとして、庾公を誅せしむ。謂えらく、必ず庾を戮さば以て峻に謝す可し、と。庾奔竄^{ほんさん}せんと欲すれば則ち不可なり。会わんと欲すれば執えられんことを恐れ、進退計る無し。温公 庾に勧めて陶に詣らしめて曰く、「卿但だ遙かに拝せ。必ず他無けん。我卿が爲に之を保せん」と。庾 温の言に従いて陶に詣る。至れば便ち拝す。陶自ら起ちて之を止めて曰く、「庾元規、何に縁りてか陶士衡を拝す」と。畢りて又降り下坐に就く、陶も又自ら起ちて同坐せんことを要む。坐定まるや、庾乃ち咎^{とが}を引き躬を責め、深く相遜謝す。陶覺えず釈然たり。

とある。陶侃(259-334)は蘇峻の反乱を鎮めようとしたとき、まず庾亮が邪魔であり庾亮さえ居なかつたら蘇峻をなだめることができると思つた。蘇峻の反乱の目的は庾亮一派を排することであつたからである。庾亮は陶侃との会見を希望していたが、捕えられるのが恐しくて進退きわまつてしまつた。温嶠(288-)

329)は庾亮に陶侃を尋ねるように勧めた。庾亮は言われた通りに陶侃を訪ねて頭を下げた。反乱の元は自分にありと認めるという態度をとったのである。ところが、陶侃の方から立ちあがって、「どうしてわたしなどに頭を下げるのか」と言つて同席するように求めた。庾亮は自分の非を認めてわが身を責め心からわびた。陶侃はすつきりとして胸のわだかまりが消えたということである。この時の陶侃と温嶠、そして庾亮の関係は、蘇峻の乱をめぐつて各々が自分の個性を發揮している様子がわかる。また、任誕第二十三30に、

蘇峻の乱に諸庾逃散す。庾冰時に呉郡為り、单身奔亡し、民吏皆去る。唯だ郡卒のみ独り小船を以て冰を載せ錢塘口に出で、蓮篠もて之を覆う。時に峻は賞募して冰を覓め、所在に属して搜検すること甚だ急なり。卒は船を市渚に捨て、困りて酒を飲みて酔いて還り、棹を舞わして船に向かいて曰く、「何れの処にか庾呉郡を覓むる、此の中便ち是なり」と。(後略)

とある。蘇峻が乱を起したは、庾家の一族は皆ばらばらに逃げた。庾亮の弟の庾冰(296〜344)は当時呉郡(江蘇省)の太守だった。彼は呉郡の兵一人だけをともなつて小舟で錢塘江の河口に出て、庾冰は竹むしろをかぶつて逃げた。途中取り調べの役人の眼をごまかして浙江を渡り、山陰(浙江省)の魏家に身を寄

せて一命をとりとめた。その後、反乱が平定されると庾冰はこの命の恩人に御礼をしたいと望んだ。するとその兵は、「下賤の身分ですので高望みはいたしません。今までは苦勞が多かつたのでいつも快く酒が飲めなかつたことが残念でした。これからは酒を十分に頂き、余生がおくれたら最高です。」と希望した。そこで庾冰は望み通りに大きな家を建ててやり、その家に百斛ひやくこくの酒が絶えないようにしてやつた。後にこのことを聞いた当時の人々は、この兵士はただ智(機転)があるだけでなく、人生の神髓に達している人物と誉めたということであるが、この小話は蘇峻の乱での一コマで、しかも庾亮直接の事ではなく、弟の庾冰に関する内容である。任誕篇の内容としては心暖まる小話である。

また、儉嗇第二十九8に、庾亮の別の一面について触れた小話がある。即ち、

蘇峻の乱に、庾太尉南に奔りて陶公に見ゆ。陶公雅より相賞重す。陶は性儉吝なり。食に及び、薤にらを噉らわしむるに、庾因りて白を留む。陶問う、「此を用て何をか為す」と。庾云う、「故より種うう可し」と。是に於いて大いに庾が唯に風流なるのみに非ず、兼ねて治実有るを歎ぜり。

とある。蘇峻が乱を起した時、庾亮は南に逃げて陶侃と会つた。陶侃は兼ねてから庾亮を高く買っていた。陶侃は性格儉吝

であつた。二人が食事をする時、薤を食べたところ、庾亮はその白いところを残した。陶侃はたずねた。「その白い部分はどいうするのか」と。すると庾亮は「もちろん、そのまままた植えたらよろしいでしょう」と云つた。そこで陶侃は庾亮がただ風流人であるだけでなく、実務的な能力もあると感歎したというのである。儉嗇、儉吝は「けち」「しみつたれ」の意である。庾亮は陶侃以上にけちではあるが、そのけちにも多種あり、後に人の為にも生かせるけちである。単なるけちではない。物質的な執着心から生ずるけちではない。

四

賞讃第八72は、庾亮が義之を最高に評した内容で有名な小話である。即ち、

庾公云う、「逸少は国挙なり」と。故に庾侃 碑文を爲りて云う、「拔萃国挙」と。

とある。庾侃は庾亮の甥。庾侃は庾倩のことであり、字は少彦。侃は幼時の字である。鄢陵(河南省)の人。庾冰の子で、東晋の廢帝孝庾皇后の兄である。太宰長史を勤め、桓温(312-373)に憎まれ、謀反の罪で殺された。庾亮が義之を評して「国挙」と言った。「国挙」とは国家的な人材として推挙されるべき人物という意である。そして庾亮の甥にあたる庾侃(庾倩)が「拔

萃国挙」と碑文に刻んだということである。当時の並み居る多くの貴族の中から、義之が敢えて庾亮によって拔擢されたということは大変なことである。他にもそれに当る人物は居たはずである。義之のどのような面が、どのような実績が国家的存在と思われるのか考えなくてはならない。同じ賞讃第八80には、殷浩(?-356)によって義之は評されている。即ち、

殷中軍 王右軍を道いて云う。「逸少は清貴の人なり。吾之に於いて甚だ至り、一時に後るる所無し」と。

とある。庾亮が義之を「国挙」と誉めれば、東晋の中軍將軍、揚州刺史であつた殷浩は、義之を「清貴」と評している。しかも当世の誰よりも義之を敬愛していると付言している。また、同じく賞讃第八100は、やはり殷浩が、

殷中軍 右軍を道う、「清鑒貴要なり」と。

と評しているが、「清貴」にしろ「清鑒貴要」にしろ義之の全体を批評するのにぴったりとした表現である。なお、『晋書』中の一篇とされ晋書後に附されている『晋安帝紀』には「義之風骨清舉也」とある。これはこの小話の注として劉孝標が記している。

また、容止第十四24には、武昌(湖北省)での秋の一夜、庾亮と義之との出会いがある。即ち、

庾太尉武昌に在り、秋夜気佳く景清く、佐吏殷浩・王胡之

の徒、南楼に登りて理詠す。音調始めて道なるとき、函道の中に履声の甚だ厲しき有るを聞く。定めて是れ庾公なり。俄かにして左右十許人を率いて歩き来たる。諸賢起ちて之を避けんを欲す。公徐に云う、「諸君少しく住まれ。老子此の処に於いて興復た浅からず」と。因りて便ち胡牀に拠り、諸人と詠諱して、坐を竟うるまで甚だ楽しみに任ずるを得たり。

後に王逸少下り、丞相 言いて此の事に及ぶ。丞相曰く、

「元規爾の時風範小しく頽れざるを得ざりしならん」と。右

軍答えて曰く、「唯だ丘壑のみ独り存せり」と。

とある。庾亮が武昌にいたある秋の夜、大気は心地よかった。

幕僚の殷浩や羲之の従兄弟の王胡之（羲之の父の弟王廙の子）

たちが、南楼に登って吟詠した。吟詠の調子が整つてきた時に、

閑道に高く響きわたる下駄の音が聞こえてきた。それは庾亮で

あった。俄かに側近十人ばかりを連れて歩いてきたので、すで

に座していた皆が立ちあがって席を譲ろうとしたら、庾亮は

「諸君そのまま動かないで、わたしはここでもなかなか楽しい

から」と、気軽に床几に腰をおろした。そして人々と吟詠談笑

して楽しんでた。後日になって羲之が都に行き、丞相の王導

と語りあった際に話がこの時の事に及んだ。すると王導は「庾

亮もその時は威儀を少しは崩さざるを得なかったのだろう」と

言った。羲之はそれに答えて「彼の胸中はきつと山水があった

だけです」と言ったとある。庾亮は、平素は端然としていて厳しい態度をとる人物なのであろう。それに比してこの時は、日頃の雑事を忘れて山水の自然を胸中に一杯に満たして、悠々自適にすごしていたのであろう。劉孝標の注に、孫綽の「庾亮碑文」を引用して、

公雅より好んで託する所、常に塵垢の外に任す。心を柔らげ世に応ずと雖も、その迹を螻屈し、而して方寸は湛然として固より玄を以って山水に對す。

とある。「方寸湛然、固以玄對山水」とはいかにも人間らしい悠然とした態度で、いくら忙しくてもこのような精神を忘れないようにしないと生きていけないのではないだろうか。心中は深く静かで、人間らしい心境で山水に對しているこの時が庾亮の最後だったのであろう。「方寸」は「心」の意、「湛然」は水が一杯満ちている意であるが、ここでは「落ちついて静かなさま」の意、「玄」は「幽玄」の意となる。

次の、輕詆第二十六は、本稿の前章、即ち、王敦の章において取り上げたので本文は省略するが、この登場人物は羲之、王敦、そして王導と庾亮の四人である。そして、王敦が一人で語って羲之をリードしている。王導のことを、「爾が家の司空なり。」といい、これは別に何の問題もないが、庾亮については、「元規復た何の難ずる所あらん」と言っている裏に何かが

あるように感じられる。軽詆篇は軽蔑してこきおろした逸話が
多く集められているのであるが、この小話では王敦が庾亮のこ
とをこきおろしていると見るべきであろう。ここに集まった王
敦、王導、羲之は琅邪の王氏一族である。特に王導や王敦は東
晋王朝建国に際し、初代皇帝元帝をたすけた有力な人物である。
それに対して、二代皇帝明帝の外戚となった庾亮は（庾亮の妹
が明穆皇后）庾氏一族の代表格であり、この両家の確執がこの
小話の中にあると一般的に見られている。確かに羲之は庾亮を
苦手としていたのであるが、羲之が突然に立ち上がって帰ろ
うとした理由は、前述にもあるようにいろいろな状態が考えら
れるのであろう。

王敦について語る時には王敦が起した謀反のことが中心にな
る。庾亮について語る時は命をねらわれた蘇峻の乱に触れない
わけにはいかない。そして、王羲之がこの二人にどのような関
係で接しているかを見ていくと同時に、その過程を通して羲之
自身はどのように生き、どのような人間性を発揮しているかを
探っていくのが本稿の目的である。

さて、王敦と羲之との関係を見ると、羲之は王敦によって特
に子供の頃は太い可愛いがられていた。王敦は羲之を熱い眼
で見守っていて、いつもエールを送ってくれていたが、ある時、

王敦の謀反の密談を耳にしてしまい、大変な事態になってしま
うが、羲之が機転をきかせて切り抜ける。これは王敦と羲之と
の関係を見ていく上で重要な小話である。

また、本稿で特に取り上げたもう一つの内容は、王含と王庾
父子の意見対立である。王含は王敦の兄で、王庾は王含の子で
ある。その王庾は王敦の養子となり、王敦の武衛將軍となった
が、王敦の反乱後は、結局は悲しい最後となってしまった。王敦
は王庾のことを、「神候可ならんと欲するに似たり」と誉め、
将来への大きな希望を抱かせていたが、王庾は王敦が見込んだ
通りの人物であったという事件が起ってしまうのである。その
事件とは、反乱後、実父の王含と王庾の身のふり方をどのよう
にするかという問題が起き、二人は対立してしまうのである。

その対立は、王含は荊州刺史であった王舒のもとへ身を寄せる
ことを主張し、子の王庾は江州刺史の王彬の所に身を寄せたい
という主張である。この対立の結果は王含の主張通りになった
が、頼りにしていた王舒は全く逆で冷たい人物であり、父子は
長江に沈められ殺されてしまったのである。もしも、子の王庾
が主張した王彬の所へ行っていたらきつとこのような結果には
ならなかったであろうという悲劇の父子の結末である。子の王
庾には人を見る目があつたということは、日頃の行為の中にも
うかがうことができ、父の王含とはその点比較にならなかつた

のである。それをずっと前から見抜いて、将来も見込んでいたのが王敦だったのである。しかし、王敦は兄の王含については決して悪く批判はしなかった。むしろ逆に人前で大いに誉めている。それを聞いた何充は厳しく「聞く所これと異なる」と追求している。やはり王敦と王含はどんなことがあってもかばいあう実の兄弟だったのである。また、西晋の雍州刺史であった楊朗は優秀な人物であり、王敦の謀反を繰返しやめさせようとしたが、結局聞き入れられず、謀反が成功したら荊州刺史に採用させるという約束までしてしまった。失敗後は南郡太守に任命されたが、明帝は楊朗を捕らえようとしたが、帝が崩御したために命拾いし、後に三公の職を兼任した。

次に庾亮と羲之との関係であるが、一つは庾亮と羲之との直接の関係ではなく、庾亮の息子の庾会と諸葛恢の娘との結婚後のことであり、結局は庾会が蘇峻に殺されてしまうという悲劇が起る。どうしてこのようなことが起ってしまうのかということであるが、蘇峻の反乱の目的は庾家一派を排することにあったのである。庾家の一族は皆ばらばらに逃げてしまい、庾亮の弟の庾冰などは小舟に乗り竹むしろをかぶって、人の目をごまかして浙江を渡って山陰の魏家に身を寄せた。蘇峻は若くして書生となり、才学があり永嘉の乱の時に流民数千家を糾合し壘を築いて主となった。そして元帝に徴され安集將軍となった。

その後、臨淮内史となって王敦の反乱を鎮圧するのに功をたてた。さらに庾亮にとりたてられて大司農となったが、庾亮の存在がどうしても気に入らず、庾亮討伐の旗を上げ反乱を起こした。しかし、結局は温嶠、陶侃、そして庾亮によって鎮圧され、都の建康に攻め入ったが敗死した。

羲之との関係は、羲之の人柄を庾亮が最高の誉め方をしている点である。「逸少は国挙なり」と、そして、甥の庾倩が「拔萃国挙」と碑に刻している。その他、羲之についての誉め言葉は「清鑒貴要」「清貴」と殷浩の評がある。

また、庾亮の人間としての精神生活を取り戻す秋の一夜の小話、即ち、容止第十四24は、「唯だ丘壑のみ独り存せり」と羲之が庾亮の胸中を思っ述べている所は印象的である。人間誰しも大自然の美しさに心うばわれる時がある。劉孝標の注にもあるように「固より玄以って山水に対す」という庾亮のように心を清めるひと時は不可欠である。また、本稿最後に扱った軽詆第二十六5は羲之の行動についての異変をめぐって、王導、王敦を中心とした王氏一族と、庾亮一族との確執が感じられる。以上のように、戦乱の中を生き抜こうとする貴族集団の諸記録が、この『世説』であると考えて読んでみると、まさに足の引っぱり会いであり、生きざまの証言集そのものであり、興味のつきないところである。その中でも本稿は特に歴史を動かし

た王敦と庾亮を中心に見てきたが、王羲之本人は恵まれた幸福な生き方をしていることが、具体的な例をもって感知することができる。羲之の親友であった謝家の代表格の謝安は中年になつて仕官し名を遺したが、これは家を守るためであつた。羲之の場合も王家を守るために仕官し、多くの尺牘を遺して自分の存在感を示したのであつた。

(付記)

さて、この度、本稿をまとめるに当り、次の文献書籍を参照させて頂きました。最後になりましたがここに記して謝意を標します。

- | | | |
|---------------|---------|-------|
| 世話新語(上・中・下) | 目加田 誠著 | 明治書院 |
| 世話新語(上・下) | 竹田 晃著 | 学習研究社 |
| 世説新語 | 森 三樹三郎訳 | 平凡社 |
| 世説新語と六朝文学 | 大矢根文次郎著 | 早大出版部 |
| 晋書 | | 中華書局 |
| 晋書(和刻本正史) | | 汲古書院 |
| 王羲之 | 中田勇次郎著 | 講談社 |
| 王羲之 | 吉川 忠夫著 | 清水書院 |
| 中国人の機智 | 井波 律子著 | 中公新書 |
| 書苑彷徨 | 杉村 邦彦著 | 二玄社 |
| 書論(第二十八・三十一号) | | 書論編集室 |

- | | | |
|----------------------|------------|--------|
| 王羲之伝 | 森野 繁夫著 | 白帝社 |
| 王羲之全書翰 | 森野繁夫・佐藤利行著 | 白帝社 |
| 中国書法史を学ぶ人のために | 杉村邦彦編 | 世界思想社 |
| 中国思想辞典 | 日原利国編 | 研文出版 |
| 辭源(正統編合訂本) | | 商務印書館 |
| 中國人名大辭典 | | 泰興書局印行 |
| 書道芸術(王羲之・王献之) | | 中央公論社 |
| 書道全集 | | 平凡社 |
| 中国書道史の10人「墨」スペシャル28号 | | 芸術新聞社 |

(人文学部日本文学科教授)